



TITLE:

範国記・知信記・兵範記

AUTHOR(S):

上横手, 雅敬

CITATION:

上横手, 雅敬. 範国記・知信記・兵範記. 静脩 1993, 30(1): 1-3

ISSUE DATE:

1993-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37192>

RIGHT:



静脩

1993 年 6 月

Vol. 30, No. 1

The Kyoto University Library Bulletin

範国記・知信記・兵範記

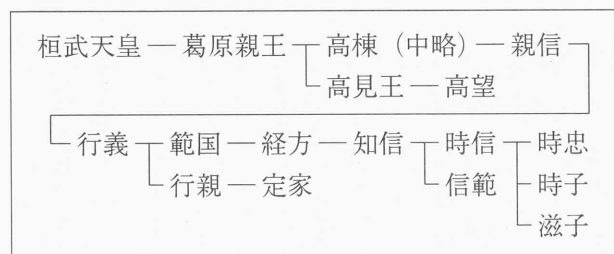
総合人間学部教授

上 横 手 雅 敬

1

京都大学附属図書館には平松文庫という集書がある。平松家は江戸時代の初め西洞院家から分かれた公家であり、明治以後は子爵となったが、京大は同家から3,100余冊の家伝の文書・記録・典籍を永久寄託され、のちそれらを一括購入したのである。

平松家は桓武平氏の流れをひいている。桓武平氏の諸流の中では、桓武天皇の皇子葛原親王の系統が栄えたが、それにも親王の子の高棟に発する系統と、孫の高望に発する系統とがある。平清盛をはじめとする武門平氏は後者に属する。前者の高棟流は宮廷貴族として繁栄し、特に参議平親信の系統は、代々有職故実詳しく、実務官僚として要職につき、丹念に日記を記してこれを伝え、「にき(日記)の家」と呼ばれた。親信・範国・行親・定家・知信・時信



の日記が残っており、それらは「平記」と総稱される。他に知信の子信範の「兵範記」があり、質量ともに上の諸記を凌駕している。これら7種の日記に書かれている年代は、天禄3年(972)～元暦元年(1184)に及び、平安中、後期200余年にわたっている。日記の書写、整理も進められたようで、信範は先祖の日記、さらに自身の日記までも、みずから清書した

り、他人に命じて書写させたりした。この信範の書写事業による古写本が、今日に伝えられているのである。平松家はこの系統の平氏の子孫である。

この系統は代々藤原摂関家、近衛家に家司として仕え、いつの日か主家に家伝の日記を献上した。ところが江戸前期になって、その一部が近衛家から信範の子孫である平松家に戻された。延宝5年(1677)中納言平松時量の懇望で、近衛基熙が信範の真蹟(と見られる)「兵範記」20余巻、「範国記」「知信記」各1巻を平松家に分与したのである。平松家本が京都大学の所蔵に帰したため、近衛家の文庫である陽明文庫(京都市右京区)と京大とは、諸記を分蔵することになった。京大には上の諸巻が、陽明文庫には「親信記」4巻、「行親記」「定家記」各1巻、「知信記」「時信記」各2巻、「兵範記」29巻が伝えられた。いずれも平安後期の古写本で、重要文化財に指定されている。

京都大学収蔵書の中、「範国記」の記主平範国は、関白藤原頼通に近侍し、従四位下、伊予守、春宮大進となっている。「範国記」の中では、永承3年(1048)の「宇治関白高野山御参詣記」が『続々群書類従』5に収められ、刊行されているが、他には長元9年(1036)夏秋冬(4月～12月)記が伝わるのみで、これは未刊である。京大蔵本はこの部分であるが、巻末の奥書によれば、範国自筆の記が焼失したため、長承2年(1133)信範が一族の左中弁平実親の所蔵本を借りて書写したという。

「知信記」の記主平知信は範国の孫で、関白藤原忠実の家司をつとめ、従四位上、出羽守となった。

その日記は大治2年(1127)から保延元年(1135)に及んでいる。一部は刊行されているが、京大収蔵の古写本は、天承2年(1132)春(正月～3月)の記で、やはり信範の書写と見られ、未完である。

「兵範記」は知信の子信範の日記である。名称は兵部卿信範の記という意味である。正三位、兵部卿になったのだから、父祖よりも出世したといえる。家司として藤原忠実・忠通・基実・基通ら近衛家歴代の撰関に仕え、鳥羽・後白河両上皇の院司をも勤め、政治や儀式に通じた有能な官僚であった。めいの時子は平清盛の妻、その妹滋子は後白河の女御で、平氏との関係も深かった。

「兵範記」は天承2年(1132)から元暦元年(1184)まで、信範が21歳から73歳に至るまでの記事が残っており、鳥羽・後白河院政期、平氏の興隆・全盛期に関する好史料であり、記事は詳密・正確な点で群を抜いている。平安後期の古写本54巻の中、29巻が陽明文庫、25巻が京大に収蔵されている。それらは日ごとに書き継がれた原本ではなく、信範その他による清書本である。

2

先年、文学部国史研究室(博物館)収蔵の平松文書中に含まれる、111葉の断簡を調査した結果、それらが京大附属図書館と陽明文庫に分蔵される「兵範記」の古写本と一連のものであることが判明した。断簡であるため、年代を明らかにし、正しい順序に配列するのはかなり困難であり、とくに年代を知る手掛りのない断簡もあるが、それらが仁安2年(1167)2月、嘉応元年(1169)7月～8月、11月、承安元年(1171)7月の記事であること、他に仁安

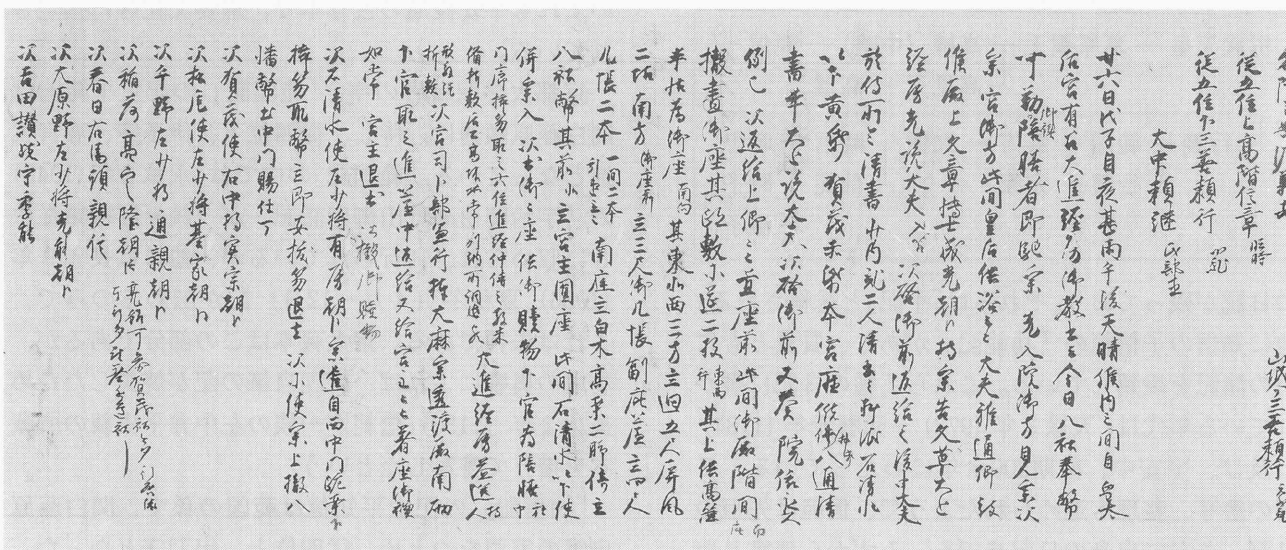
2年3月7日条、10月21日条を含むことがわかった。その後、年月日を明らかにする仕事を進め、年月日未詳の断簡は12葉を残すのみとなったが、それらは難物中の難物である。

「兵範記」は著名な日記であるだけに、すでに『史料大成』で活字本5冊が刊行されているが、これらの断簡は完全な新史料である。平安後期の、原本にも近い未完の日記が5か月分も発見された意義は大きい。附属図書館には嘉応元年8月6日～9月29日の記が収蔵されているが、これにこの断簡約40葉、陽明文庫所蔵の断簡3葉を加えることによって、7月から9月末にいたる嘉応元年秋巻がほぼ完全に復元できるのも、成果の1つである。歌人式子内親王の生年は不明であったが、久安5年(1149)であることがわかったのも収穫であった。

今年の3月、今度は附属図書館から「兵範記」の断簡があるとの御連絡を受けた。仁安3年3月23～26日の記である。仁安3年3月巻は陽明文庫の所蔵であり、その一部が脱落したらしい。この部分は『史料大成』ですでに刊行されており、その底本となった近世の写本には収められていたのだから、その後脱落したことになる。しかし逆に古写本にあって、『史料大成』本に欠けている場合もあるから、脱落の事情を説明するのは難しい。

主要部分が陽明文庫にあって、断簡が京大にあったと述べたが、逆に主要部分が京大にあって、断簡が陽明文庫にある場合もある。保元2年(1157)11月15日条、嘉応元年(1169)7月26～8月3日条などの断簡がそれである。これも説明困難である。

上に述べたように、陽明文庫所蔵の「平記」・「兵範記」と、京大のそれとは、本来は一体である。最



「兵範記」仁安3年3月巻断簡(部分)

近は影印による出版が盛んで、古記録の形状をそのまま知りうるようになっているが、陽明文庫所蔵の日記・文書は『陽明叢書』として影印による出版が進められている。「兵範記」の古写本29巻は『人車記』（全4冊）の書名で、私が解題を付してこの叢書で刊行した（「人車記」の「人」は信範の「信」の扁、「車」は「範」の一部で、「人車記」は「兵範記」の別称）。

次いで『京都大学史料叢書』の一部として、今度は『兵範記』の書名で、京大所蔵分の出版をやはり影印で進めている。全4冊の予定で、3冊はすでに刊行を終えたが、その中には「兵範記」古写本25巻の中、20巻が含まれている。いよいよ最後の1冊が

残ったが、それには「兵範記」古写本残り5巻のほか、「範国記」「知信記」、それに文学部博物館・附属図書館の「兵範記」断簡までも収め、さらに解題を加えることになる。「範国記」「知信記」、それに「兵範記」断簡の多くは、未刊の、学界未紹介の史料である。刊行が遅れて御迷惑をかけて来たが、いそいで完成させたいと思う。

なおこれらの日記の多くは、文書の裏を用いて書かれており、日記の裏の文書にも貴重なものが少なくない。『陽明叢書』『京都大学史料叢書』（いずれも思文閣出版刊）では、これらの裏文書の刊行も計画されている由である。

お知らせ

文庫・新書の貸出をはじめました

現在、附属図書館ではおよそ2,000冊の文庫や新書を2階開架室に別置しています。その種類は次のとおりです。

岩波文庫	483冊
岩波新書	460冊
講談社学術文庫	442冊
文庫クセジュ（白水社）	85冊
講談社ブルーバックス	478冊
その他（一部別置のもの）	
白峰文庫	角川文庫
講談社文庫	学振新書
集英社文庫	テレビ文庫
文春文庫	徳間文庫
中公新書	

本図書館では、この別置しているもののほかに、一般図書と同様に貸出できる文庫や新書もありますが、別置している多くのものは「館内」扱いにして、貸出はしていませんでした。以前より利用者から貸出の要望がありましたが、その際には当日のみの一時持ち出しなら出来ると答えて来ました。

しかし、たった一日の持ち出しや閲覧のみでは十分な利用はできず、掛員の答えを聞いて、手に持っていた文庫本の利用を断念してしまう方も見受けられました。このような状況を考慮し、より有効に図書館資料を利用していただくために、貸出サービスを6月21日より開始することになりました。

貸出の方法は、書庫内図書等の貸出と同様、マニユ

アル貸出方式になります。少々面倒ですが、新たなサービスで試行錯誤の段階でもあり、ご協力をお願いします。詳しい事や細かい点などは、カウンターまでお問い合わせ下さい。貸出期間は2週間以内、一度に貸出できる冊数は1冊です。

その対象となる文庫・新書本は、2階の階段をあがってすぐのところ（休憩コーナーロビーの前）に配架してあります。背表紙に青いシールを貼ってありますのでおわかりいただけると思います。どうぞ、ご利用下さい。

（資料運用掛）

「図書館の達人」（ビデオ）を購入しました

昨年度、図書館の利用案内に役立てるために標記のビデオを購入しました。ところで、この「図書館の達人」とは一体どんな人なのでしょう。経験を積んだプロの図書館員のことでしょうか。いいえ、ここで言う図書館の達人とは図書館活用の達人、すなわち利用者のことです。

このビデオでは、図書館の機能や活用法をドラマ形式で紹介していきます。このビデオを見ることにより、利用者は図書館の利用法や効率的な文献探索の方法を学ぶことができ、図書館活用の達人になれる、というのが製作者の意図のようです。

テープは3巻からなり、内容は（1）図書館の機能、（2）文献探索の基礎、（3）雑誌記事の調べ方、に分かれています。各巻平均18分、全巻を見ても1時間程度ですので一見をおすすめします。

利用を希望される方は、3階の雑誌・特殊資料掛カウンターでお申し込み下さい。

（雑誌・特殊資料掛）